

佐土原キリスト教会 2023年11月19日 礼拝説教

聖書箇所：コリント人への手紙第二 12章 8～11節

説教題：わが恵み汝に足れり

皆様、特別讃美礼拝によるこそお出で下さいました。

早速ですが、水野源三という方をご存じでしょうか。水野源三さんは、1937年、長野県で生まれました。元気な子供でした。ところが1946年、小学4年の時に、村に発生した集団赤痢で脳性麻痺になり、それ以来、首から下の体の自由、言葉の自由を奪われて、瞬きしか出来ない、47歳で亡くなるまで、生涯、その状態で過ごされた方です。体が不自由になった時、当時まだ声が出ていた彼の口から出るのは「死ぬ、死ぬ…」という言葉だったのです。その口もやがて利けなくなりました。水野さんは、少年にして、全くの絶望の中に置かれたのです。お母さんはパン屋をしながら水野さんの介護をしました。

そのパン屋にある日、高齢の牧師がパンを買いに来て、家の奥に人の気配を感じ、水野さんのことを知るのでした。彼は、水野さんに1冊の聖書を置いて帰りました。水野さんは、その聖書を読んだのです。聖書は漢字に全部ルビが振ってありますから、12歳の水野さんにも読めたのです。水野さんは生きるための水を求めていました。その彼に、いのちの水が注がれました。水野さんは、聖書を通して神に出会い、信仰を持つのです。そして13歳でキリスト教の洗礼を受けました。「本当に源ちゃんはパッと変わった」と家族が言うほど劇的に変わったのです。その後、お母さんの持つ五十音版で瞬きで言葉を伝え、神を称える短歌や詩を書いて素晴らしい証しの人生を全うされました。生涯に4冊の詩集も発行され、詩集の発行は「現代の奇蹟」と呼ばれました。

なぜ、水野源三さんのお話を紹介したかと申しますと、今朝、中姉妹が、水野さんの詩を歌にした讃美も歌って下さると聞いたからです。なぜ中姉妹が水野さんの歌を取り上げられたのだろうか、私なりに考えてみました。それは、絶望的な状況の水野さんに、生きる喜びを与え、そのご生涯を希望に生かし続けられた神様の恵みを、お集いの皆様に紹介したいと思われたのではないかと、思ったのです。

先ほど、「聖書」を読んで頂きましたが、あの中にあつた「わたしの恵みはあなたに十分である」という言葉は、水野さんの最初の詩集のタイトルの言葉です。「わが恵み汝に足れり」とつけられています。水野さんはどういう思いをこのタイトルに込められたのでしょうか。

「新約聖書」の半分くらいを書いたパウロという人がいます。歴史家が「イエスとパウロによって世界の歴史は変わった」と言う人です。しかし彼は、どうにもならない慢性的な病気を患っていたのです。目の病気か、マラリヤ熱か、良く分かりません。パウロは神様に「神様、この病気を何とかして下さい」と何度も何度も祈ったのです。しかし、その時、神様の答えは「わたしの恵みは、あなたに十分である。というのは、わたしの力は、弱さのうちに完全に現われるからである」(2コリント12:9)。つまり神様は「その病は取り去られることはないかも知れないが、しかし、その弱さに耐える力、その弱さを遥かに覆う恵みを与え続けよう」と言われたのです。パウロは、体の弱さがあるからこそ神に頼り、神に頼る時、彼を守り、支え、様々な困難に勝利させてゆく神の力、神の恵みを経験して行くのです。パウロは、その神の力、神の恵みを語りたかったのです。

水野さんが、この言葉をご自分の詩集のタイトルにつけたのも、正にその思いからだっただけではないかと思えます。かつて「死にたい、死にたい…」と死ぬことしか考えていなかった自分がいた、生きて行く何の望みもなかった自分がいたのです。彼は詩に書いています。「キリストの御愛に触れたその時に、キリストの御愛に触れたその時、私の心は変わりました。喜びと希望の朝の光がさして来ました」。その自分が、現実には瞬きしか出来ない体だけれども、しかし心には、神に愛され、神に生かされている喜びが沸き上がって来るのです。神が共に生きて下さるところから来る希望が沸き上がって来るのです。生かされていることが感謝なのです。彼はこうも言っています。「神を讃えても、讃えても、讃えつくせなき」。

神様という方は、何という方かと思えます。また彼は、自分の苦しみの意味も見出しました。「苦しみを通してキリストを、神を知ることが出来た」、それで満足したのです。それほど、キリストを、神を、十字架を、天国を知ることが、彼にとって素晴らしい恵みだったのです。

水野さんを主人公にしたビデオの中に小学3年の「一秀君」という少年と水野さんとの出会いが描かれていました。彼は小さい時から色々な病気に悩み、水野さんに出会う前も失明するかも知れないという状況にありました。クリスチャンであるお母さんから水野さんのことを聞いた一秀君は、「水野さんに会いたい」と言って、お母さんに連れられて水野さんを訪ねました。水野さんは、一秀君に語りかけることは出来ません。しかし一秀君の持つ苦難の意味を一番良く知っているかのように、慈愛に満ちた眼差しで一秀君を優しく迎えたのです。一秀君は、ジッと食い入るように水野さんを見つめます。その一秀君に、水野さんは、瞬きでこう語りかけました。「他の人と、比べないようにして、生きて行って下さい」。こうやって、水野さんは、人を励ます人になって行ったのです。「一秀君…苦しい時、悲しい時に…愛の御神を仰げよ」という詩も捧げています。

私は水野さんの生涯を思う時、神様の素晴らしさ、神様の恵みの素晴らしさを疑うことは出来ません。そして私自身も、それまでの人生で一番苦しい時、病院で「死にたいですか」と聞かれるようなところを通った時、神の恵みで立ち上がらせてもらった1人です。神の恵みは、皆様にも与えられ、注がれる恵みです。苦しければ苦しいほど、問題が大きければ大きいほど、「私が十分な恵みよってあなたを支え、守り、生かして行く」と語って下さる恵みです。今朝、お出で下さった皆様に、その恵みをご自分のものにして頂くことを心からお勧め申し上げます。

さて今朝、中姉妹は、水野さんの歌ばかりでなく、色々な讃美歌を歌って下さいますし、また皆様とご一緒に歌いたいと願っておられます。水野さんの詩の中に「天のお父様と、声を出して、お呼びしたい」という言葉があります。水野さんも色々な讃美のテープを聞いておられたようです。きっと声に出して思いっきり讃美歌を歌いたくしていただろうと思えます。水野さんの分まで、今朝、恵みの神様を歌う讃美歌を、皆様とご一緒に歌いたいと願っております。

「聖書」に「わが神…あなたは聖であられ、イスラエルの賛美を住まいとしておられます」(詩篇 22:1,3)という言葉があります。讃美歌を歌う時、私達は、そこに臨在される神に触れることが出来ると信じます。讃美歌を聞いて頂き、ご一緒に歌って頂くことで、水野さんに喜びを与え、生きる希望を与え続けた神様に触れて頂ければ幸いです。そして、繰り返しになりますが、恵みの神様を、ご自分の神様としてお考え頂ければ幸いです。